

ストックホルムセンタ だより 第1号

1. 刊行に当たって

当センターでは、平成13年5月の開設以来、様々な形で現地の資料・情報を収集し適宜報告してまいりましたが、今年度からは、これに加えて、センターの行事や各種イベントへの参加、対応機関や大学の紹介、さらには社会や文化なども含めた広い意味での現地の情報について、毎月「ストックホルムセンターだより」を発行することにより、定期的に情報発信を致します。正直申し上げると、毎回興味を持ってお読みいただけるような内容を盛り込むことができるか自信がありませんが、まずは「継続すること」を第一の目標とし、その中で内容を徐々に充実させていきたいと考えております。お気づきの点等がございましたら、お気軽に御連絡いただくと幸いです。(水田)

2. オフィス及びスタッフの紹介

オフィスについて

日本学術振興会は、現在9カ国(米国、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデン、エジプト、ケニア及びタイ)の海外研究連絡センターを設置しております。

当センターは、平成13年5月にストックホルムのカロリンスカ研究所(スウェーデン唯一の国立の医学専門大学)敷地内に設置され、スウェーデンを含む北欧5カ国(スウェーデン、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、アイスランド)及びバルト3国(エストニア、ラトビア、リトアニア)を対象国とし、学术交流・協力の推進のため活動を幅広く行っています。主な活動内容は、(1)フォーラム・コロッキウムの開催、(2)学術振興施策・研究動向等の情報収集、(3)学術情報の広報・周知、(4)同窓会組織化の支援活動です。(土屋)

スタッフ紹介

現在、スタッフは常勤職員5名と少人数ではありますが、和気藹々と仕事をしています。岡崎恒子新センター長(藤田保健衛生大学客員教授、名古屋大学名誉教授)をはじめ、水田事務官(文部科学省科学技術・学術政策局国際交流官付専門官)、現地スタッフのHanna Lonn、研修生の澤登ゆり子(東京大学職員)と土屋友紀(横浜国立大学職員)です。岡崎センター長は、この4月に開催のコロッキウムに出席しましたが、着任は6月早々になる予定です。(土屋)

(下段右より岡崎所長、澤登研修生 上段右より水田事務官、Hanna、土屋研修生)

(新所長の岡崎先生)



3. センタ - の行事



会場: ヨーテボリ大学経済商法学部

第4回コロッキウム「現代日本社会研究」開催

2004年4月21日(水)及び22日(木)の2日間、スウェーデン第二の規模の都市であるヨーテボリにあるヨーテボリ大学経済商法学部キャンパスにおいて、当センターと北欧現代日本社会研究(NAJS)との共催による現代日本社会研究に関するコロッキウムを開催しました。

当センターでは、平成14年度から当地に最先端の研究を紹介することを主たる目的とする「サイエンスフォーラム」と別に、30代から40代前半の日本・北欧双方の若手研究者を対象に、研究交の促進を目的として、討論を重視した研究発表会である「コロッキウム」を実施しており、これまで、生命科学(第1回)、ナノサイエンス・ナノテクノロジー(第2回)、フォトニクス(第3回)の分野で開催してきております。

今回は第4回として、北欧及び日本の若手現代日本社会研究者の交流を深めることを目的に開催したもので、当センターとして初めての社会科学系の会議となりました。共催者であるNAJSは、2002年にスウェーデン及び他の北欧諸国における現代日本社会研究・教育を促進するために創設された学会です。

21日ブレ-ンスト-ミグ会場



21日は、終日ブレンスト-ミグセッションが行われました。冒頭に当センター岡崎恒子センター長、ヨーテボリ大学のMargareta Wallin Petterson 副学長、NAJS 実行委員のLinus Hagdrom 先生 の挨拶があり、その後、各参加者から現在の研究及び今後の興味ある研究テーマについてランチタイムをはさんで各15分程度の発表がありました。参加者は、日本側は、葛西弘隆先生(津田塾大学:政治学)香山リカ先生(帝塚山学院大学:精神科医、心理学)、岡本智周先生(早稲田大学:社会学)、小野澤あかね先生(琉球大学:現代日

本史、ジェンダー論)、清水耕介先生(関西外国語大学:国際政治経済)の5名、また、北欧側はLinus Hagstrom 先生(スウェーデン国際問題研究所:政治学)、Pia Moberg 先生(修辞学)、Staffan Appelgren 氏(社会人類学)、Martin Flyxe 氏(教育学:以上ヨーテボリ大学)、Riikka Lansialmi 先生(ラウレア・ポリテクニク(フィンランド):言語学、比較文化)、Lars-M. Sorensen 氏(コペンハーゲン大学:映画研究)の6名、計11名。

戦後米国占領期の状況を映画から分析 (ラ-ス・マルティン・ソレンセン氏)

一通りの発表が終わった後は、3テ-マ 北欧及び日本双方の研究環境(特に社会科学系)、共通性のある研究テーマ及び今後の協力の可能性について、各1時間ずつ意見交換を行いました。研究資金、ナショナリズム、グローバリゼーション、コミュニケーション、言語学、ジェンダー、多文化化(各国におけるマイノリティーの社会環境)等話の幅は広く、4時に開始した討論は3時間にわたる白熱した議論となり、終了は7時となりました。その後、8時から「Fiskkrogen」のレストランにおいて、参加者によるディナーを開催しました。岡崎センター長の乾杯に始まり、各参加者は、互いのバックグラウンドや日本文化など、様々な話題に花を咲かせ、交流を深めることができました。最後に、当センターから、北欧側参加者に記念品としてお箸を贈呈しました。



翌22日は、スタファン・アッペルグレン氏(ヨ-テボリ大学アジア研究所)の司会により、一般への公開(参加者13名)によるパネルディスカッションを行いました。冒頭、各講師から自己紹介を行った後、主としてテーマである「現代日本社会は問題か?」という観点から意見発表がなされました。参加者は、前日の意見交換の概要をまとめつつ、さらに各自の意見を発展させながら現代日本社会に関する研究テーマについて2時間の討論を行い、最後に会場から、言語やナショナリズムの問題については接点もあり、今後の協力が可能ではないかとの発言があり、議論のひとつのまとめとなりました。

今回は、当センターとして初めての社会科学系の会議であり、また従来のコロッキム(テーマの一致する講師の最新の研究について発表し合う形式)とは異なり、「現代日本社会研究」という形でネットワークを作っている北欧側の研究者が、日本側のカウンターパートを求めて日本の幅広い分野の有力若手研究者と知り合い、議論を発展させていくという手法を用いました。その点、これまでとは多少内容を異にするものでありましたが、今後の研究者交流の可能性について相互に理解を深めるための率直な

意見交換を活発に行うことができました。NAJSは、今回のコロキウムに引き続き、さらに参加者を増やして2日間にわたるカンファレンスを開催しており、今回の一連の会合をきっかけとし、日本と北欧諸国の研究者の間で社会科学分野、特に「現代日本社会研究」をテーマとする研究者のネットワークが構築されることを期待しています。(水田)

22日のパネルディスカッション会場



Coffee Break (親睦を深めている様子)



4. 各種イベントへの参加

(1) 4月14日(水) Asian Network Meeting



2004年4月14日(水)11:00からストックホルム大学 Department of Oriental Languages の会議室において「Asian Network Meeting」が開催されました。Asian Network は、8週毎に定期的に会議を開催しており、今回は主催責任者であるストックホルム大学 Ewa Blixt 氏の依頼により JSPS のフェロ・シップを中心とする活動概要を紹介することになりました。

Ewa Blixt 氏は2年前、「Asian Network at the Center for Pacific Ocean-studies」を結成し、現在にいたるまで数多くの 세미나・ワークショップ、レクチャ・等を積極的に行っており、現在、Asian Network のメンバーは28名にいたり、日本、中国、韓国、台湾等アジアと関わりのある官公庁、研究財団、大学、ほかスウェーデンの団体等関係者から構成されています。

14日は、主催責任者であるストックホルム大学 Ewa Blixt 氏から冒頭に挨拶があった後、Sweden-Japan Foundation (SJF)の瑞日基金の活動状況や奨学金情報等について説明があり、続いて当センター・水田事務官から JSPS のフェロ・シップを中心とする活動概要の紹介があり、Swedish Institutet (SI) Ms Chatarina Rejler から奨学金情報についての説明がありました。各説明後、質疑応答があり、JSPS の活動については、フェロ・シップの採択状況や帰国後のフォローアップについて等の質問がありました。会議は13時半すぎで終了し、その後、参加者10名と昼食を共にし、情報交換を行いました。

学術情報の広報・周知はセンターの主業務のひとつでもあり、今後もこのような活動を通じ、JSPS のフェロ・シップ事業を当地に広めていきたいと思っております。(澤登)

(2) 4月22日(木) Meeting Point Japan

2004年4月22日17時15分よりストックホルムの World Trade Center にて Sweden-Japan Foundation・Swedish Trade Council の主催、Japanese Business Men's Club、JETRO、Ministry for Foreign Affairs Swedish Care Institute、Swedish Federation of Trade/Importer's Council Swedish Institute for Growth Policy Studies (ITPS) Swedish-Japanese Parliamentary Association Swedish-Japan Society、Tokyo Style in Stockholm 共催による Meeting Point Japan が開催されました。

今回のセミナーは初めての試みで、日本とスウェーデンのビジネス、両国の高等教育・研究等について関心がある方が集まり、セミナーを通じ最新情報の入手や、情報交換、相互交流を深めることを主旨として行われました。

冒頭の Magnus Vahlquist 氏 (Sweden-Japan Foundation 会長)、大塚 清一郎氏 (在スウェーデン日本国大使館特命全権大使) の挨拶後、各代表者から日本経済、産業の最新動向、日本と西洋のビジネス習慣、意思決定の違い等の発表があり、発表後 Princess Christina Mrs. Magnuson より「Sweden Foundation for Strategic Research」の奨学金受賞者に対する授与式が行われました。さらに、19時半過ぎから約150名の参加者による Asian Buffet Dinner がひらかれ、展示ブースの見学、他の参加者との情報交換、関係者への岡崎所長の紹介等をおこない、今後の人的ネットワークの拡大につながるものとなりました。

残念ながら当センターの職員は、昼過ぎまでヨーテボリにおいてコロッキウムを開催していたため、途中参加となりましたが、このように、スウェーデンと日本との交流を学術関係者のみならず幅広い視点から広げていくことは、当センターの活動としても大変重要なことと思われます。今年は行事が重なった関係で消極的な参加となりましたが、来年度以降、主催者とも相談しつつ、ブースの出展や同窓会の会合の同時開催等も併せて検討していきたいと思っております。(澤登)

5. ニュース&トピックス

このコーナーでは、スウェーデンをはじめとする北欧・バルト地域の、教育・学術・科学技術に関する最新のニュースやトピックスを紹介していきたいと思っております。今月は、以下の2件をピックアップしてみました。(水田)

<初等中等教育>

公立高校の授業を民間企業にアウトソーシングすることを検討

スウェーデン政府は、教育の質を高めるため、例えば数学のような高等学校で核となる教科の教育を民間企業にアウトソーシングすることを検討中であることがトーマス・エストロス教育科学大臣によって明らかにされました。例としては、ボルボは既に市立の高校で車両工学のトレーニングプログラムの一部を担当しているけれども、数学についても担当できるのではないかと考えたことが挙げられています。

す。スウェーデンの法律では、職業関連や芸術に関する科目については公立学校がアウトソーシングすることを認めています。その他の科目についてアウトソーシングするには法改正が必要となるため、エストロス教育科学大臣は、必要な法改正の可能性について検討を開始するとのことです。

(Svenska Dagbladet 新聞 3月 19日 6面)

< 学術・科学技術 >

ストックホルムは米国以外で No1 の知識経済!

英国のコンサルタントである Robert Huggins Associates が発表した「The third annual World Knowledge Competitiveness」によれば、ストックホルムは、調査対象とされた世界の 125 地域の中で、知識を経済価値に移転する能力に関して、米国の 13 地域 (第 1 位はシリコンバレー) に続く第 14 位にランクされており、「米国以外で最も競争的な知識経済 (Knowledge Economy)」と紹介されています。このランキングは、雇用、特許登録、R&D への投資、教育支出、IT インフラ等の指標に基づいて作成されたもので、ストックホルムのほか、西スウェーデンが 44 位、南スウェーデンが 52 位となっているほか、レポートでは 1 国 1 地域としてカウントされているノルウェーが 54 位、デンマークが 62 位にランクされています。

(Dagens Industri 新聞 4月 14日 25面)

6. コラム

このコーナーでは、スウェーデン中心とする北欧・バルト地域の、歴史、社会や文化、福祉等に関するトピックを紹介していきたいと思えます。今月は、都市の紹介に 4 月にコロッキウムが開催されたヨ - テ - ポリを、文化にまつわるものとして復活祭 (イ - スタ) について取り上げます。

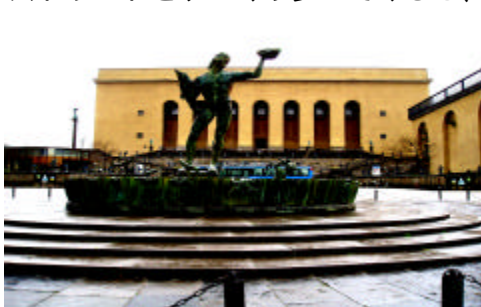
都市の紹介: ヨ - テポリ ~ グスタフ・アドルフ二世により築かれた港町 ~

ヨ - テポリは、首都ストックホルムに次ぐ第二の都市であり、人口約 43 万人、工業・貿易の町として栄えているスウェーデン最大の港町です。ドイツ、デンマーク、イギリス、オランダへと海路を開き、年間何百万という旅客がスウェーデンに入学しています。このヨ - テ - ポリが都市としてスタートしたのは 1621 年。デンマークを相手に数々の戦いを経て、時の国王グスタフ・アドルフ二世の指示により軍事港町として築かれました。町の設計はオランダの助けを借り、アムステルダムを手本に作られていて、現在でも水濠や運河はほぼ当時の姿をとどめています。

18 世紀になると、ヨ - テ - ポリは軍事都市から商業都市へと急激な発展を遂げました。その中心となったのが東インド会社で、取引の範囲は欧州から、インド・中国等のアジアにまで及び、特に中国との関係は強く、陶器をはじめ漆器に絹製品、コ - ヒ、お茶、各種スパイスなどが輸入対象となりました。東インド会社は運河のそばにあり、現在では「ヨ - テ - ポリ市立博物館」として公開されており、市民生活の解説から、アジア貿易で輸入された陶器などの製品が展示され、当時の賑わいぶりが想像されます。19 世紀に入ると工業化が進み、ヨ - テポリは西の玄関として重要な港へと成長していきました。

< 市内の見どころ >

運河のある中心街からヨ - タ広場まで、カフェやレストランやショッピングセンターが並ぶメインストリートをゆっくり歩いてみると、ヨ - テポリらしいファッショナブルな雰囲気がよく分かります。



市立美術館

(手前の彫刻はカ - ル ミレスの海神像ボセイドン)

アベニュー - の始点のヨ - タ広場には、カ - ル ミレス (Carl Milles) の彫刻で有名な海神像ボセイドンがあり、その真中には、美術館や劇場、コンサ - トホ - ルなど多くの文化施設が集中し、別名「文化の中心地」と呼ばれています。正面の市立美術館にはカ - ル ラ - ション (Carl Larsson) を始めとする 19 ~ 20 世紀の北欧画家の作品があり、北欧独特の「光」を賛美する作品はみごたえがあります。他にも巨匠レンブラントに代表される 16、17 世紀のオランダやイタリア、スペイン、フランスの絵画やカ - ルミレス (Carl Milles) に代表される彫刻も鑑賞できます。(土屋)

参考文献

- ・ 「スウェーデン大自然が呼吸する白夜の国」著者 萩野 純一 出版社日経 BP 社 2001
- ・ 「Welcome to Gothenburg and the rest of Sweden - 西スウェーデンへの橋渡し」著者 Pia Moberg, Karin Danielsson, Teruko Shimizu 翻訳: Mio Nakamura 出版社 JAPCO 1995

北欧文化の紹介

～祝祭日と伝統行事～

スウェーデンの多くの祝祭日は、四季の移り変わりに関連し、キリスト教ほか北欧神話など宗教的でない場合があります。町全体で参加して行う祭りは少なく、家族内でまたは親しい人たちと共に伝統的な祝祭日の料理や家の飾り付けを楽しむことが多いといわれます。今月から折をみて、スウェーデンの伝統行事を紹介していきたいと思います。

4月特集:復活祭(イースター)について

復活祭は、ご存知のとおりキリストの祝日で、宗教的にはキリストが処刑後に復活する、再生する日を意味しますが、スウェーデンの復活祭には異宗教的な要素も色濃く残っています。復活祭前夜には悪魔に会うために、魔女達がほうきにまたがりブルの山に集まって来るといわれており、魔女から身を守るために、人々は焚き火をしていました。今日では、焚き火のかわりに爆竹を鳴らしたり、花火を打ち上げたりします。また、子供達は復活祭に付き物の新しい命の象徴である卵の殻に、模様を描いたり、魔女に扮装して町中を歩きます。卵の方は後で、復活祭のご馳走と一緒に食べてしまいます。また、子供達は保育所や学校で、鮮やかな色に染められた羽根や、魔女やニワトリの飾りをつるした木の枝を作り、家に飾ります。学校も伝統を次の世代へ伝えていく大切な役割を果たしているといえます。

ストックホルム市内でもこの時期、黄色やピンクなど色鮮やかに染められた羽根飾りの枝が花屋さんで売られており、卵の飾り物がデパート内でもよく見うけられます。復活祭前日から一部を除き、ほとんどの商店関係のお店、図書館、博物館、コンサートのホールなどは閉まってしまうため、市内はひっそりと静かです。最近では、復活祭休暇には若者達は旅行にでかけていると聞いています。(土屋)

参考文献:「Welcome to Goteborg and the rest of Sveden-西スウェーデンへの橋渡し」

著者 Pia Moberg, Karin Danielsson, Teruko Shimuzu 翻訳: Mio Nakamura 出版社 JAPCO 1995

【編集後記】

東京の喧騒から離れて森と湖に囲まれたスウェーデンにきてから約1か月。センタースタッフの皆さんや現地の人たちの温かい支えのもとで、月日は飛ぶように過ぎ去りました。

北欧のベニスともいわれるスウェーデンの首都、ストックホルム。メラン湖に浮かぶ市庁舎や旧市街地ガムラスタンの美しさは、私に心地よい安らぎ与えてくれます。厳しい冬の気候に耐えながらようやく訪れた日の光がまぶしいこの季節には、黄色・白・紫のクロッカスやサフランが咲き始め、太陽の感謝が町じゅうに溢れています。この街の風景を語ると、かわいらしい犬やベビーカーを押す女性と傍らに立っている男性の姿、無邪気に笑う子供たちや杖をついて歩くお年寄りの姿など。福祉に行き届いた段差の少ない街は、人々の行動範囲を広げていると実感できます。スウェーデンの福祉の考え方は、身体の不自由な人たちに手を貸してあげるのではなく、誰もが人の手を借りずに行動できる社会だといわれます。

スウェーデンの素晴らしさは福祉や教育、男女平等、自然を愛し、自由を尊重する「心の豊かさ」など様々な分野で知られてます。私たちセンタースタッフの目を通じて北欧の魅力が、センタースタッフの活動と共に毎月の「センターだより」から少しでも伝わっていただければと新緑の夏の気配を感じるこの国から願っています。(土屋)

監修: 岡崎 恒子 (ストックホルム研究連絡センタースタッフ - 長)

編集長: 水田 功 (ストックホルム研究連絡センタースタッフ - 事務官 E-mail: i-mizuta@jsps-sto.com)

編集担当: 土屋 友紀 (研修生 E-mail: gakushin3@jsps-sto.com)

執筆: 水田 功、土屋 友紀、澤登 ゆり子 (研修生 E-mail: gakushin2@jsps-sto.com)

JSPS Stockholm office Fogdevreten 2, S-171-77 Stockholm, Sweden

TEL +46 08 5088 4561 FAX +46 (0)8 31 38 86 <http://www.jsps-sto.com>

